

こどもと共に生きる



森岡和子

公園住宅の五階の窓から下を見る。今しがた降りて行った小さい

三人兄妹が、団地の遊園地にある砂場とブランコに、それぞれ所を得て遊んでいる姿が見える。土曜日も午後三時を過ぎると学校帰りのこども達も多くなり、歓声がこだまのように響いてくる。団地のこの一角の広場だけでも三、四十人はいるであろうか。

一年生になったばかりの兄の姿が見えなくなったと思うと、やがて自転車を乗りまわしている三、四人に混って力一杯ペダルを踏んでいるのが見える。五階のこの窓に気付いたのか片手を離して振って見せる。四十世帯のはいった建物の周囲を回る自転車の

数がふえスピードも速くなってゆく。

ふと気が付くと、遊園地のブランコや砂場の付近の様子がかわり、先に遊んでいたこどもは姿を消し、メンバーが替っている。はっと思つて目を転ずると、二人の姉妹はいつの間に行つたのか、向う側の住宅の建物との間から見える隣接した造成地で、赤土の斜面を大きいこどもにならって、迂り降りている。腰にダンボールの切端を敷くことを覚え、片手にそれを持ち、片手で大きく伸びた草にしがみつぎながら登って行っては迂り降りる。何回やれば満足するのか、はずむ鼓動と息づかいがこの窓まで伝わってくるようだ。小さい方は己が限界に気付いたのか、さっさと遊び

を変え草の中を跳び歩いている。虫でも追っかけているのだから。

勢い込んだ足音とドアーの音で兄が駆け込んで来る。虫籠を手にするともう駆け降りてゆく。大きな殿様ベッタを捕えたとか。

どうやらばらばらで遊んでいた三人が虫取りで一つになり、捕えた虫の処置で困り兄が五階まで駆け上って来たようだ。"降りて行って見てやらなくていいのか"と母親に聞く。"いちいち降りて行ってたら大変、この間も団地育児の先輩にそのことで笑われた"という。

太陽が西の公団住宅の向うに傾き遊園地も半は陰って来た。虫籠を自転車ハンドルのぶらさげて、兄が意気揚々と引きあげてくる。小さい妹が四階に住む四、五年らしいというお兄さんの自転車で乗せてもらって続く。やがて補助車のついた黄色の自転車を押して上の妹が建物の下へ繰り出してくる。また一しきり自転車のグループが後になり先になり建物を回る。

気が付くともう遊園地や広場からの歓声は止んでいる。空の色に気付くのか夕方の肌寒さに時間を知りなのか、また家から呼ばれたこどもの行動に引かれてか、潮の引くように人影がなくなっている。造成地の方も草がなびいているだけ。三人の小さい兄妹の足音がコトコトと階段に聞え次々と帰って来る。上気した充実感

のあふれる顔で……。あれだけのこども達が夕暮れた各棟・各階のそれぞれの同じ型の住居へまちがえもせず帰ってゆく。吸いこまれるように、見えない糸に手繰り寄せられでもするように……。

棟々に薄やみが忍び寄る。そのやみの不安をかき消すようにあちらこちらの窓に灯がともる。ほっとした思いで我にかえる。

昭和初期の保育について蒐集した資料を整理しながら、頭の中には数ヵ月前に目の当りにした都市の団地で遊ぶこども達の姿が絶えず浮んできます。それは私自身の小さかった時からは想像もつかない様子でした。それでいて本質的にはちっともちがっていないようにも思えます。それぞれの時代を背景にこどもの遊びがあり生活があります。また時代や社会的な問題を乗り越えて、どのような場所にも状況下にも、こどもの遊びがたくましく繰り広げられて来ていることに気付かされます。

しかし、あの団地内の遊びのなかには、昔の地域遊戯集団に見られたような有機的な係わり合いのなかで、大きい子も小さい子も一緒になって一つの遊びを繰り広げている様子、大きいこども

の工夫で始まった遊びが次々に展開し、面白さに時間を忘れ暗くなるのも気付かず集中して遊んだ昔の遊戯集団のような姿は見かけることが出来ません。団地の子ども集団は人数は多く、エネルギーは十分に燃焼し、生き生きとした歓声は揚り、たしかに昔の子どもたちとも変っていないようではありますが、丁度大きな集団の並行遊びのような、個々ばらばらのような感じで、遊戯集団のみんなが一人一人を知りつくし、リーダー的役割から世話され可愛がられる役割まで、それぞれが地位を得て自己を出し切って係わり合い遊びを作り出してゆく、いわば社会化された遊びが展開しているような様子はあまり見られません。——旅行者として短い期間、しかもごく主観的にかい間見ただけでいきれぬものでないとは思いますが……。

考えてみますと、私の小さかった頃は子ども集団だけでなく、古くから住みつきま何らかの係わり合いを持ち、地域集団として大人同士も知りつくし認容し、お互いに手を差し伸べて生活していたようです。その生活実態がそのまま子どもの遊戯集団に浸透していたのではないのでしょうか。今日の団地のように高層化し孤立化した住居状況で、核家族中心のしかも仕事に追われ他を顧るいとまのない個々の生活の背景で、昔のような遊戯集団をとりもどすことは至難のわざかも知れません。

保育の目的は、「乳幼児の全面的な発達を授け社会適応をすすめ、既存の文化を継承・維持し、さらに創造変革し社会の発展に寄与出来る者の基礎を培ってゆくこと」その通りでしょう。しかし子どもを、今日築かれている文化、この社会への適応準備の時期としてのみ見るならば、彼等は社会の成員とて見られていないことになりはしないのでしょうか。子ども達が社会の枠外の存在としてしか意識されていないような現実が気付かされることがあります。社会は大人と子どもによって成り立っており、子どもも社会の成員の一人として社会生活を享受し、それぞれの発達に応じ生き生きと社会的生活を充実させることが大切です。社会適応や性格形成・しつけという大義名分のもとで、現在最も必要な子どもの生活の充実が追いやられ、大人の都合や思わく、社会的生活規範による大人の言い分で処理されてしまっているようなことがないといえるのでしょうか。

幼い子どもにとって社会的生活の充実とはどういうことでしょうか。生き生きと輝いた目、好奇心にあふれ意欲に満ちた活動、遊びの喜びや目的達成のために、仲間と共に労を惜しまず体験を共有しあう姿、そのなかに生命の喜びと躍動、生きる彼等の証し

を見る事が出来ます。

原初的基礎的な欲求が十分に満された時、全ての感覚が外へ向って開かれあらゆるものを吸収してやまない零歳児。初めての出合いによって結ばれた母親との絆、その絆を基地に探索活動でもって自己の生活領域を拡大してゆこうとする一歳児。大人の目からは目的も何も見出せない活動を、失敗しても繰り返して父親のように母親のようにと志向する二歳児。遊びのなかに自分の能力やイメージの顕現を見て歓喜し、安定した母子関係を土台に、信頼感をもって仲間との係わりを築きはじめる三歳児。仲間と共に知的世界を拡大しようとする未知のことがらにいどみ、課題意識をもって遊びに取りくもとうとする四歳児。自分の遊びの目的が仲間のものとなり、仲間のそれを自分のものとして、共有した目的と遊びで感情体験を一つにし、その連帯感から生命の充実・喜びを実感する五歳児。以上のような生れてからの人間社会においての経験が、こどもを更に次元の高い社会目的にむかって意欲的に取りくめるような人間に成長させてゆくのだと思います。私共保育者は、その土台の過程でどうこどもと係わり、共に生きる社会の成員として姿勢をとってゆけばよいでしょうか。自閉的なこども、登校拒否児や意欲的でないこども、更にこども同志の連帯感が薄れ一緒に遊べないなどがうんぬんされる今日、両親はもとよりこ

どもについての仕事に係わる私共、いや全ての大人の今日的な命題であると思います。

それでは一体、私共大人はどのような時に生命の燃焼・生の充実感を得ているでしょうか。川喜田二郎氏はある教育論のなかで、「人間というのは物事を達成するという体験がないと、本当の人間らしさというものを実感としてつかみ取れない動物である。達成体験で人間らしさを実感した人間は、自分の生きている世界にみずみずしさを感じ、喜びを感じ更にファイトを燃やして何かをやるうとする。一言でいえば生き生きすることである。そしてそれは人間の心を開き、人間同志の連帯を生むのみでなく、その心情は更に自然や物的環境にまで及ぶ」ということを言っておられます。

達成体験なくしては人間は本当の人間らしさを実感することはできないということですが、それとともに私共は達成の過程でその努力や労苦を支える背後の力を感じ、成就の暁にはそれが何かの役に立ち達成の喜びを共にすることを思うことで、生の充実を実感し積極的に生きようとする生きがいを与えられてゆくものと思います。

「達成するということが、外界から情報や知識をインプットし

で、自分の力で加工処理してアウトプットへ持ってゆくことであり、インプットからアウトプットへとフルコース経験されたとき、『やった』という達成体験が得られる」と川喜田氏は述べられていますが、幼いこともほど、毎日の生活をそのように生きていると言えるのではないでしょうか。

発達のなかで獲得していった経験や能力を一杯に使って、新しい経験にいとみ、今までに得た知識や情報、体験を彼等なりに再構成し遊びの中に実現してゆく。その過程と成就感を通して得た喜びを大人に分かとうとし、仲間同志共有し連帯感を強めて更に意欲的な活動で未知の世界へわけ入ろうとする。私共の保育（幼児教育）もそこに焦点をあわせて進めてきたと思います。このごく素朴な原点到めて目をそそがねばならなくなったことは、今日幼い子ども達にとって大切なことが忘れられてきているからではないでしょうか。

幼い者ほど人間らしく生きようとし、みずみずしい感受性と生きる喜びで連帯感を育て、自然の中にその感性をとけこませようとしています。彼等のそのような生活へ大人は立ち入ってこま切れにし、教育のための教育、合理的な保育で、かえって人間らしく生きる姿みずみずしい感受性を奪い取っているようなことはいでしょうか。幼い父親母親が多くなったといわれます。将来大

人になった時よい仕事、よい暮しが確保できるようにと、勉強一すじによい中学よい高校よい大学を目ざして受験体制の波に乗せられて来た彼等のなかには、幼い時からの達成体験が少なく精神的成長もとげ得ず、子育てにゆきづまり、或は始めから回避してこどもは保育所や幼稚園へ入れさえすれば育つように思っている者が出てくるのも不思議ないような思いにとられます。保育所や幼稚園に課せられている問題の重みを実感として感じさせられます。

*

*

私自身が子育てを始めた頃から感動をもって今も心に留めている詩があります。

- 一つるときは 何もかもはじめてだった。
 - 二つるとき 僕はまるつきりしんまいだった。
 - 三つるとき ぼくはやつとぼくになった。
 - 四つるとき ぼくは大きくなりました。
 - 五つるとき 何から何までおもしろかった。
 - 今は六つで ありつたけおこです。
- だからいつまでも六つでいたいと ぼくは おもいます。

——ミルン——

素朴な短い言葉の中に乳幼児の姿、大切な発達のポイントがおさえられています。短い一行が多くのことを語り息づいていきます。詩人は本当に子どもと共に人間らしく生き、共に感じそのみずみずしい感性で子どもを見、この詩が生れたと思います。子どもに近くその息吹を身に受けつつ生きることなくしては、この詩は生れなかったでしょう。子どものそれぞれの姿の背後に、発達と共に係わって来た大人の姿が見えるようです。

私共は子どもを社会の成員とし、私共とともに人の世を歩むものとしなければならぬと思います。大人自身がその生活のなかで自らの達成体験を通して人間らしさを実感し、そのみずみずしさをとりもどし、子どもとの共感と体験の共有を、ごくささやかな身近なことで折りにふれもつこと。このことは子どもとの係わりだけでなく達成体験から得られるもう一つの面、大人同志の連帯感、人と彼との属する組織（地域集団）への連帯感を育て、子どもたちが有機的な係わりの中で社会化された遊びの展開が望める遊戯集団の、母体となる新しい地域集団が団地のなかにも作られるのではないのでしょうか。

大人と子どもとの係わりは、その発達にともなって現象形態は変って来ます。しかしこのようにして幼い時から結ばれてきた絆

は変わりません。共に生きる実感をとらえつつ、大人も子どもと一緒に人間らしく、母親として父親として、また保育者として成長してゆきたいものです。

社会の成員として共に歩んだ子どもも、やがて私共から単立ち、またその子どもと歩みはじめます。レバノンの詩人カーリル・ジバンは、今世紀の初めに、あなたは弓、子どもは生きた矢だ、と詩っています。十分にひきしぼられた弓と矢は一体です。

しかし射手（神）は大能の力でその弓を曲げ、はるかかなたにその的を見て矢を放つのです。そこは弓である私共のとうてい訪ねてゆくことの出来ない明日の家なのです。詩人は最後にこう詩っています。

射手の手の中でひきしぼられることを喜べ

射手はとびゆく矢を愛するよう

しっかりかまえられた弓をも愛するからだ。

地上に生れ出た脆い生命が大人との係わり合いのなかで成長し単立ってゆくまで、それは二十数年に及ぶ長い道程です。が充分に引きしぼられた弓の役割を果したいものです。とびゆく矢を愛しその弓を支える大能の力のもとで、正しく文化が伝承され社会は創造的変革をとげつつ受け継がれてゆくとあります。

（高知女子大学保育短期大学部）